

自分を守る！	▶重要資産の防護と回復力の強化	予備施設・バックアップ施設を確保する	この取組のポイント
010	AI アナウンサーによる災害報道		✓ 人工知能アナウンサーが災害情報を提供
			✓ 長時間途切れることなく最新情報を読み上げる
取組主体	従業員数	想定災害	実施地域
NPO 法人エフエム和歌山	8名	地震等	和歌山県

NPO 法人エフエム和歌山は、平成 29 年に開発した人工知能（AI）を用いたアナウンサーを用いて災害発生時に、災害情報を絶え間なく提供している。

1 取組の特徴（特色、はじめたきっかけ、狙い、工夫した点、苦労した点）

被災時に災害情報を流し続けることは容易ではない

- 現在、災害情報はテレビやスマートフォンでも入手することができるが、全国的な組織が情報発信を行っているケースが多く、災害の規模が大きくなればなるほど、地域ごとの詳細な情報は手に入れにくくなる傾向にある。一方、地元に着した情報を提供するラジオの地域放送では、災害情報においても身近なエリアに関する警報や被害情報を届けことができ、必要な情報を必要としている人に的確に伝える役割を担うことが期待される。
- 和歌山市を中心に約 50 万人を対象にコミュニティ FM 放送「バナナエフエム」を提供している NPO 法人エフエム和歌山では、東日本大震災の際に被災地の FM 局の視察を実施した。その際に同局のクロスメディア局長は、現場では、スタッフや資金が不足し、長時間にわたって災害関連情報を提供し続けることが困難なケースが多く、必ずしも十分な災害情報の発信がなされていないことに気づいた。ある放送局では、情報発信は 1 日 3 回のみで、ほかはすべて音楽を流しているという状況等も見られた。
- これを受け同局は人的リソースが手薄になりやすい災害時であっても、ラジオをつけた地域の人々が欲しい情報がすぐに手に入れることができる、省力化した放送システムを探し始め、大手情報サービス企業から、人工知能（AI）を活用したデータの読み上げサービスが提供されていること知った。同局では、この技術をもとに、指定した時間に自動的に原稿を生成し、読み上げるシステムと、用意した原稿を繰り返し読み続けるシステムを開発し、平成 29 年から実際の放送で使い始めている。

AI アナウンサーの特徴

- AI アナウンサーとは自動で原稿を作成し、読み上げるシステムである。同局では天気予報等については AI アナウンサーに記事を作成させている一方、正確性が求められる災害情報については、スタッフが選別・作成したものを使用している。なお本システムは同クロスメディア局長によって開発され、約 1,000 円の年間コストで運用されている。また、28 の国と地域の言語に自動翻訳し、再生することができる。
- AI アナウンサーは PC とインターネットがあればどこからでも放送ができるという特徴を持つため、災害時の柔軟な対応が可能となる。例えば、有事の際には同局のスタッフが多言語で避難を呼びかけながら自身もパソコンを持って避難し、その場所から細かな地域の情報を伝え続けることも可能である。また、原稿を Twitter に自動で投稿することができ、SNS 上での情報発信もあわせて実施できる。

AI アナウンサーの実績

- AI アナウンサーは平成 29 年に台風 18 号が和歌山県に接近した際に、和歌山市内で発生した約 4000 世帯の停電状況や、台風の進路等刻々と変化する情報を約 5 時間にわたって伝え続けた。同年台風 21 号では衆議院選挙も実施されていたが、同局では AI アナウンサーに台風情報を任せ、ほかのスタッフがその合間に選挙の中継、特番を差し込むことで、2 つの重要なニュースをあわせて住民に届けた。
- また、平成 30 年の台風 21 号による被害で、和歌山市が大規模な停電となり、夜間に住民が情報を得ることが難しくなった際にも、AI アナウンサーは途切れることなく台風情報を流し続けた。また同年の西日本豪雨において午前 3 時に避難情報が発令された際には、ニュース原稿の執筆スタッフが自宅からクラウド上のシステムにアクセスし、

国土強靱化

数分後には AI アナウンサーを使用して避難情報を放送した。同局ではその後、人間のアナウンサーが出社するまで、最新情報をアナウンスし続けた。



AI アナウンサーの自動翻訳原稿

2 取組の平時における利活用の状況

- 同システムは日頃よりニュースや天気予報、音楽番組の全自動放送に活用されている。また、イベント等で突発的な録音が必要になった際も、同システムが話した音源が活用されており、日常的にラジオ制作スタッフに使用されている。このように平時から活用されているため、いざという際にも十分に AI アナウンサーを活用できるような体制となっている。

3 現状の課題・今後の展開等

世界中の被災者の役に立てるよう開発を続ける

- 同局では現在、同様のシステムをクラウド化し、全国のラジオ局で使用できるようにしており、国内の約 20 局で運用がなされている。同クロスメディア局長は、世界コミュニティラジオ放送連盟のアジアカンファレンスで講演を行い、多くのアジア新興国から賛同を得た経験から、今後は国内に留まらず、世界でのラジオ自体の価値向上につながり、ラジオ業界のインフラになるような開発を続ける方針である。

4 周囲の声

- エフエム和歌山の AI アナウンサーによる災害報道を耳にした際に、抑揚のない機械音で情報を伝えているため、煽られるような印象を受けず冷静に聞き取れると感じました。当放送局でも、災害時には人間による報道体制が整うまで AI アナウンサーを使って報道する予定です。通常は、天気予報や交通情報に AI アナウンサーを使用しており、視聴者からは機械の声でも違和感なく聞けるというコメントをいただいています。（同システムを導入した首都圏の放送局の担当者）

担当者の声

AI アナウンサーはラジオの防災能力をアップデートしました

- これまでのラジオは、災害情報が放送されるまで「待つ」必要があり、情報を入手するまで音楽等を聞き続ける必要がありました。
- AI アナウンサーは、最新の情報を延々と繰り返し放送してくれます。災害時は深夜でも休日でも、ラジオのスイッチを入れれば必ず災害情報が手に入ります。この変化を多くの方に知っていただきたいと考えています。



問合せ先

NPO 法人エフエム和歌山 法人番号: 1170005001901
TEL 073-444-4803 FAX 073-446-3696 E-Mail post@877.fm